

研究課題

電子カルテの活用により教育の精度を高める
～軽度発達障害・不登校傾向等の子供たちの支援事例を中心として～

●学校名 西尾市立西尾小学校〔取材10月18日〕 <http://schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310012>
●所在地 愛知県西尾市錦城町162-1 ●研究代表者 伊藤 吉弘 教諭

リアルタイムで情報提供。教員全員で子供たちを支援。

西尾小学校では、児童のちょっとした心の変化や行動を、教員がいつでも把握できるよう、電子カルテシステムを導入。すべての教員にパソコンが配置され、日常の教育実践の中でハッとした〈この子〉の現象をはじめ、全児童の気になった行動や発言を常にカルテに記

録している。その記録は教員全員が閲覧可能で、それらの情報から当該児童に合った声掛けや見守りを実践。リアルタイムの情報提供、データの集計・編集、および管理を通して、児童の6年間の成長を促す試みである。

研究課題設定の背景 全教職員が児童の心情・行動を理解する為に

西尾小学校では児童の把握、指導、評価には一人ひとりの〈カルテ〉がとても有効であると考え、以前から抽出児童の現象を記録するカルテ「心のあゆみ」が存在した。しかし、当時のカルテはファイルによるもので、書き込みや閲覧に手間を要し、すべての教員が目を通すには時間がかかった。その結果、情報を共有するツールとしては利便性に欠けていた。

同校でも、軽度の発達障害や「登校しぶり」、母子分離不安、自信喪失などの児童が増加してきた。ところが、全教職員の協力体制のもとで子供一人一人に応じた支援が十分に出来ていないのが実態であった。

そこで、病院などで導入されている電子カルテに着目。いつでも書き込みや閲覧が可能で、素早く情報を共有できるからだ。さらにはパソコンの画面上で閲覧する（ペーパー化して持ち歩かない）ため情報の流出も防げるという利点もあり、平成16年から校内ネットワークを整備、電子カルテの開発を開始。平成17年に電子カルテの導入に踏み切った。



電子カルテTOP画面

実践経過 情報共有はもちろん、情報の管理・編集も簡単に

現在活用している電子カルテは、全教員が共有して使い易くするため、約1年かけて開発した。児童の現象を記録する「心のあゆみ」を中心に、校内行事のスケジュールや教員個人のスケジュール、児童の出席状況や成績など様々なデータ管理が可能である。

さらにこれらの情報が簡単に選択・編集できるため、会議資料なども手軽に作成することができる。成績表や出欠席表などの作成においても、管理データからそのまま転用するため、「書き写しまちがい」もない。

今年度からは助成によって映像情報処理ソフトウェアが導入され、画像による情報（児童を撮った写真や児童の作品など）の管理も可能となった。画像を通じて、より具体的な情報が確認できるようになり、これまで探れなかった「気づき」が期待できる。

また、この映像処理ソフトにより、現存する資料をスキャンしたうえで映像化し、パソコン上で管理が可能になるので、校内書類のペーパーレス化も進んだ。



映像情報処理ソフトにより取り込まれた生徒の絵



取り込まれた画像を編集

システム管理 厳重なセキュリティーで、個人情報保護

これまで使われていた「紙カルテ」は、管理上いくつかの問題点があった。しかし、この電子カルテでは厳重なセキュリティーの導入によって、児童や関係者以外の目に触れることはない。

まず、パソコン立ち上げ時と電子カルテ立ち上げ時に、それぞれパスワードが必要で、二重のパスワードをクリアしなければ電子カルテのデータを引き出すことはできない。さらに利用制限も設定され、情報内容によっては閲覧できる人が限定されている。また、万が一パソコンが

盗難に遭った場合も、データはすべてサーバーで管理されているため、パソコン単体ではデータは引き出せない。たとえサーバーのみを持ち出しても、パスワードを設定した端末がなければ、やはりデータは引き出せないシステムになっている。

個人情報の保護が叫ばれる中で、個人情報をもとに児童一人一人に合った支援を行うためには、こうした厳重なセキュリティーが設定された電子カルテは非常に有効だ。

導入効果 情報交換によって、即フォローが可能に

電子カルテの大きなメリットは、常にリアルな情報を発信でき、蓄積したデータ（書き込み）をいつでも簡単に見直せることである。「登校しぶり」や、自信喪失児童などがよく訪れる保健室では、こうした児童の行動や様子を常にリアルタイムで発信。病気やケガをした児童の情報なども即座に全教員に発信することで、児童本人や保護者へのフォローも素早くできる。こうした日常的に行われている教員間の情報共有によって、好結果となった事例を紹介する。

＜ケース①＞ A教諭はC君のケンカの仲裁に入った際、すれ違った教諭の「その子はトカゲ博士だよ」という一言を耳にし、かつてC君がトカゲを学校に持ってきていたという電子カルテの書き込みを思い出した。そこで「C君はどんなトカゲが好きなんだ？」と声をかけたところ、たちまち意識がトカゲの話に向き、その場がうまく納まった。

＜ケース②＞ B教諭のクラスでテストが行われた時、D君は満点を取ったが、よくよく見直すと、1ヵ所間違っていたことが分かった。D君は正直にB教諭に間違いを申告。満点だったらゲームソフトを買ってもらえたのに…と落ち込んでいた様子をすぐさま電子カルテに書き込んだ。その書き込みを見たA教諭は、D君の正直な行いを保護者に伝えるべきだとアドバイス。B教諭はその日のうちにD君の母親に事実を電話で話して、母親は子供の行いにこ褒美として約束のゲームソフト

を買ってあげた。

ケース①は、カルテの書き込みをA教諭が見ていたことからC君へのフォローがうまくいった事例。ケース②は、リアルタイムに行われた書き込みにより、素早い対応でD君の母親にフォローができた事例である。いずれも電子カルテの導入後すぐに、こうした活用効果が現れ、両教諭とも導入のメリットを実感したという。



保健室から情報発信する鳥居陽子先生

課題と展望 電子カルテで、大きく変わる教育の世界

「電子カルテを導入したことで、いじめや登校拒否などが完全に防止できるものではないと思います。しかし、それらの前兆を知るためには非常に有効なシステムです。なによりも、情報提供によって児童が興味を持っている事を知ることができ、その児童とのコミュニケーションが上手くいくことが最大の収穫だと考えています」と、研究代表者の伊藤教諭は話す。

現在「心のあゆみ」のような情報共有ができる電子カルテを採用している学校は、全国でも数少ないと思われる。「実績がないので分かりにくいでしょうね。それに新しいことに対する抵抗もあると思います。当校でもこのシステム導入を提案した当初、コンピューターの

扱いに慣れていない教員には戸惑いが見られました。しかし実際に導入し、システムを稼働してみると、その便利さにほとんどの教員が手放せないという声に変わりました」と、他校での導入例が少ない理由について伊藤教諭は分析する。

このシステムを導入したことによって、教員間に「全教員で児童を見守る」という意識の変化が見られ、児童一人一人に対するまなざしが温かくなってきたという。「大げさではなく、このシステムで教育の世界は大きく変わると思います」と熱く語る。

課題は、教職員が、いまいちど「カルテの哲学」を学び直し、子供理解の深度を高め、真の意味での教師集団を形成していくことである。